

アジア・太平洋研究センター主催研究会

日 時：2009年6月5日（金）

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所会議室

テーマ：東南アジアの共産党再考——『未完に終わった国際協力：マラヤ共産党と兄弟党』（風響社2009年）を読み解く

基調報告：村嶋英治（早稲田大学教授）

討 論：中村元哉（南山大学准教授），宮沢千尋（南山大学准教授），
蔡毅（南山大学教授），小林寧子（南山大学教授）



村嶋英治氏



研究会の様子

下記のような順序で発表を行った。

1. 基調報告 早稲田大学アジア太平洋研究科 村嶋英治教授
2. 中国側から見た東南アジア共産党との関係 アジア太平洋研究センター
中村元哉准教授
3. ベトナムとマラヤ共産党との関係の一側面 人類文化学科 宮沢千尋准教授
4. インドネシア共産党の歴史的評価の現状 アジア太平洋研究センター
小林寧子教授
5. 中国国民の知る東南アジア共産党 アジア太平洋研究センター 蔡毅教授
6. 原からの回答
7. 質疑応答

それぞれの内容は、要旨次のようなものだった。

1. 村嶋教授
(1) 詳細な調査で貴重な研究だが、短期的には、本格的な東南アジア研究であればあるほど読者は限られる。

(2) タイ共産党とマラヤ共産党の類似性と相違点

共に、党員が1930年代に10代で運動に参加して20代後半から指導部を形成し、その地位を維持したまま80年代の終焉を迎えた。ホー・チ・ミンが1930年4月に結党大会を主宰した点、中国共産党の活動家が指導部を形成していた点は同じだが、タイ共産党最高指導部には多数のベトナム人がいた。タイ共はラオス、カンボジアの党との関係も深かった。逆に、インドネシア共産党との関係は余りなかった。また、タイ共は、1947年に「中国共産党タイ総支局」とタイ共とに分離したこと、第2次大戦後1940年代末に武装闘争を開始しなかったこと、そのために批判を受けることもなかったことは、マ共と大きく異なる。タイ共がタイ人参加に腐心しタイ人幹部をできるだけ表に出そうとしたこと、しかし華人最高幹部間の会話は華語中心だったこと、などは、マレー人参加に努めたものの華人中心から抜け出せなかったマ共と似ている。党員がベトナムで軍事訓練を受けたこと（1976～78年に400人）も共通している。

(3) タイ共と中国との関係

文化大革命期、幹部の一部を修正主義者として肅清する動きがあったが、対象者が察知し身を隠したため未遂に終わった。中国の軍事顧問団3名が1971年頃、将校200名程度が1975～76年頃、タイ共訓練のために派遣された。北タイ、東北タイには中国から武器援助もあったが、南タイは自力調達だった。中国からバンコクの華人実業家を仲介してタイ共に資金が提供された。中越関係が悪化した1979年、ラオスにあったタイ共本部は撤退を余儀なくされ、逃げ遅れた幹部はラオス政府に逮捕監禁された（10年余り後に逃亡）。1980年末にタイ共はタイ政府に反ベトナム統一戦線を提案したが、政府側は拒否した。

(4) タイ共のその後

1985年頃までに全部隊が投降した。タクシン政権（2001年2月9日～2006年9月19日）、現在のタクシン派（赤シャツ派）に、元共産党員が参加している。

2. 中村元哉准教授

中国では、東南アジアの共産党に関する資料は未公開で、今後も公開される見通しはない。国と国との関係、党と党との関係は別で、後者は、公式報道がなくなった後も簡単には切れなかったのではないか。

3. 小林教授

インドネシア国内では9.30事件以降インドネシア共産党（PKI）そのものばかりでなくPKI研究も禁止されており、PKIについて初めて聞く事柄がいくつかあった。1948年のマディウン事件も未解明である。マ共を指導したPKI指導者の中には、イ

インドネシアでは知られていない者もいる。9.30 事件については、人権、土地改革、人民軍（民兵）創設計画などからの研究が手掛けられるようになった。

4. 蔡教授

東南アジア共産党関係の資料は、中国国家档案馆、中国共産党対外連絡部にあるはずだが、公開されていない。研究書の出版は主に香港で行われる。革命輸出は使命とされていたが、一般国民には東南アジアの共産党について、あるいは諸党への支援停止についてはほとんど知らされなかった。例外は PKI のアイディット議長で、毛沢東が処刑された同議長を悼んで読んだ詩が知られている（蔡教授はここで、暗記していたこの詩を書き示した。別掲の蔡論文を参照されたい）。また、中国政府は公式には認めていないが、ベトナム戦争には多数の中国兵が参戦した。そのため、中越紛争が起きた時中国側は「恩知らず」としてベトナムの辺境で焦土作戦さえ行った。

5. 宮沢准教授

(1) Quinn Judge, *Ho Chi Minh, The Missing Years*, California, University of California Press, 2002 に、マ共のライテク書記長（在任 1939～1947 年）はフランス警察に供述記録が残るチュオン・フオック・ダット（Truong Phuok Dat = 張福達？ = 漢字は宮沢氏の推測）ではないか、とある。供述によると、略歴は、ベトナム中部ファンラン生まれ、1933 年逮捕、34 年イギリスによりシンガポールにスパイとして派遣され、マ共内で頭角を現す。

(2) 1947 年に密かにベトナムに渡ったマラヤ共産党義勇兵

原の書には「イギリス植民地当局の禁止をかいくぐって 3 人がベトナムに赴いたが、その後の消息は不明」とされている（pp.132-135）が、Viet Bao（越報）2005 年 12 月 23 日付のインターネット記事に、マ共義勇兵・チャン・ムンボイ（Chan Mun Boy. 陳文梅？ = 漢字は原の推測）の履歴が紹介されている。同行者は 2 人でなく 3 人だったという。

6. 原

中村先生への答え。マラヤ共産党の場合、1974 年の国交樹立後も確かに党と党との関係は密かに続けられたが、次第に先細りになった。報道の減少は、関係希薄化に見合っている。例えば 1975 年 4 月のマ共結成 35 周年への中共からの祝電は人民日報 1 面最上段に大きく報道されたが、マレーシア政府から強い抗議を受け、80 年の結党 50 周年には祝電は送られたものの人民日報には全く報道されなかった。以後、祝電が送られることはなかった。

7. 質疑：吉川洋子教授 他

フィリピン共産党には、ミンダナオ経由で PKI 党員が多数入っていた。

戦後のマ共にはソ連の影響力はあったのか。→ 原の回答：バリン会談までは強い影響力があつたようだが、中ソ対立が顕在化するとマ共は中国側についてソ連の影響力は失われた。

(文責：原不二夫)